

過去世

岡本かの子

青空文庫

池は雨中の夕陽の加減で、水銀のやうに縁だけ盛り上つて光つた。池の胴を挟んでゐる杉木立と青蘆あしの洲すとは、両脇から錆び込む腐蝕ふしょくのやうに黝くろずんで来た。

窓外のかういふ風景を背景にして、室内の食卓の世話をしてゐる女主人の姿は妖あやしく美しかった。格幅かつぶくのいゝ身体に豊かに着こなした明石あかしの着物、面高おもだかで眼の大きい智的な顔も一色に紫がゝつた栗色くりに見えた。古墳の中の空氣をゼリーで凝こらして身につけてゐるやうだつた。室内でたつた一人の客の私は、もう灯ひをともしてもいゝ時分なのを、さうしないのは、今宵私を招いた趣旨ほたるの螢見物に何か関係があるのかも知れないと思ひ、すこしは薄気味悪くも我慢して、勧められるまゝ晩餐ばんさんのコースを拂はかせて行つた。だん／＼募る夕闇の中に銀の食器と主客の装身具が、星座の星のやうに煌きらめいた。

女主人久隅雪子は私と女学校の同級生で、学校を卒業するとしばらく下町の親の家に居たことだけは判つたが、直ぐ消息を断つた。それから十年あまりして私は既に結婚してゐて、良人おとこに連れられて外遊する船がナポリに着いた時、行き違ひに出て行かうとする船に乗り込む遽あわただしいかの女に、埠頭ふとうでぱつたり出遭であつて、僅わずかにお互たがいに手を握つた。あとは私の帰朝後を待つてといひ残して訣わかれてしまつた。

二人ともいはゆる箱入娘で、女学生にしてもすでに知らねばならない生理的の智識に疎
いところがあり、よく師友から笑ひ者にされた。その代り二人は競つて難しい詩や哲学の
書物を読んだ。さういつた関係から、双方無口であり極度の含羞はにかみやでありながら、何か
黙照し合ふものがあるつもりで頼母たのもしく思つてゐた。だが私が四年目に帰朝し、それから
二三年も経つたのに、かの女からは再び何の消息もなく、同窓の誰も知らなかつた。一度
こちらから親の家へ尋ね合した手紙は、久しく前に移転して住所不明の附箋ふせんで返されて来
た。

ところが突然かの女は郊外の新居といふのから電話して来て、車を廻して寄越よこし、自宅
で蛭見物をさすといふのに、のん気な昔の友人訪問の氣持を取り戻して、私は来て見たの
であつた。

淡い甘さの澱粉質でんぷんの匂ひに、松脂まつやにと蘭花らんを混ぜたやうな熱帶的な芳香ほうこうが私の鼻を
うつた。女主人は女中から温まつた皿を取次いで私の前へ置いた。

「アテチヨコですか？」

「お好き？」

「えゝ。でも、レストランでなくて素人しろうとのおうちでかういふお料理珍しいと思ふわ」

「素人ぢやございせんわ。店の司厨長シエッフを呼び寄せて、みな下で作らして居ますのよ」

「わぎく、まあ、恐れ入りました」

「私、最近に下町で瀟洒しょうしゃなレストランを始めようと思つて、店や料理人を用意してありますのよ」

女主人はレモンの汁を私の皿の手前に絞つて呉くれ、程よく食塩と辛子からしを落して呉れた。私は大きな松の実のやうな菜果を手探りで皮を一枚づゝ剥はぎ、剥げ根にちよつぽり塊かたまつてついてゐる果肉に薬味の汁をつけて、その滋味を前歯で刮かき取ることにこどものやうな興味わかを湧わしながら、

「まあ、あなたがお料理屋を、どうして」

「――何かして紛らしてゐなければ――独身女はしじゆう焦々いらいらしますのよ」

さう云つて友はちよつと眉まゆを寄せたが、友の内心には何処どこかさとりめいた寛くつろいだ場所が出来、一脈の涼風が過か不及ふきゆうなしの往来をしてゐるらしくも感じられる。下手な情感的な態度を見せては案外友を煩うるさがらさぬともかぎらない。

「それよりも、私、私が今度買ひ取つて落着くやうになつたこの家に就いて不思議な因縁話があるの、あなたに聴いて頂かうと思つて……さう陽気な話ぢやありませんの。灯^ひをつけて話しますわ」

夕顔の花のやうな照り色のシャンデリヤがぼつとついた。室内の照明に負けて窓外の景色はたちまち幕を閉ぢて、雨の銀糸が黒い幕面にかすれた。一たん眼を冥^{つむ}つた友はまたぱつと開いて私の顔を真面^{まとも}に見た。これも昔見た友の癖である。

かの女は女学校を卒業して親の家で結婚前の生活をしてゐる期間に、望まれて父親の知合ひで郊外に隠寮を持つ退職官吏Yの家へ客分として預けられることになつた。

退職官吏Yの考へでは、自分の蒐^{しゅう}集^{しゅう}品^{ひん}の殊^{こと}にこまかい細工ものゝ昔人形や、壊れものゝ陶^{すえ}もの類は、骨董^{こつどう}美術品商の娘であるかの女の馴^なれて丹念な指先が、手入れ保存に適當だと思つたからであつた。かの女の父はまたかの女がたとへ富んだ老舗^{しにせ}の長女でも、下町の娘であるからには躰^{しづ}けに至らぬ我^{わが}儘^{まま}なところがあらう。一度は上層智識階級の家へ入れて見習はしたいといふ昔風の考へがあつた。雪子の父はなまじなよその夫人よりY

家の主人を非常に厳格な躰け正しい人と信じてゐたから……

かの女はちよつとした嫁入支度ほどの調度を持つて、Yの隠寮へ寄寓した。

あてがはれた庭向きの客座敷の隣の八畳へ調度を収めて、女らしい部屋にしてかの女は落着いた。家長のYは、かの女が落着くとすぐ部屋に兵児帯へこおびをちよつきり結びにした大兵ようの体を唐突に運び入れて来て、衣桁いこうにかけた紅入りの着ものや、刺繡ししゅうをした鏡台の覆ふひをまじく見て、

「娘の子を一人持ったやうだ」

これが精一杯のお世辞の挨拶あいさつだといふやうに、ぶつきら棒に云つた。そして直ぐ椽えんから盆栽棚のたくさん並んでゐる庭へ下りて行つた。

その後はYは一度も部屋に見舞つて来なかつた。そしてとても仕切れないほどの所蔵品の手入れを命じたり、観賞するためにあれこれと蔵から出し入れさせられて煩うるさかつた。彼は偏執症の蒐集慾以外に精力を使ふことを絶対に嫌つた。早く妻に訣わかれてからは、異性には全然関心を持たなかつた。それは彼の最も世の中で価値ありとする品とか氣位とか惻り

巧こうとかを誑きやう惑わくする魔まし性しやうのものに外ほかならなかつた。たゞ彼は氣短きだんになつて、しば／＼癩かん癩しゃくを起した。それらの性癖しやうへくの諸点しよてんが却かえつて彼を嚴格端正げつげくていせいに表面化へうめんかさせたのだと雪子はYに就いての世評せいへうの裏を知つた。

何にでも極度に好き嫌ききらひをつけるYは、自分の息子兄弟にもそれをした。弟息子の梅うめ磨まは父の唯一ちゆういの寵児ちゆうじだつた。彼はやゝ下膨しもぶくれの瓜実うりざね顔がほの、こんもり高い鼻の根に迫らぬやう切れ目正しくついてゐる両眼の黒い瞳に、長い睫毛まつげを煙らせて、地を見入つてゐるときには、何を考へてゐるか誰も察さめしがつかなかつた。桐きりの花のやうに典雅でつくねんとした美しさが匂におつた。声も鋭さを輾なめして楽しい響きを持つてゐた。彼はいつでも不機嫌ふきげんに近く黙つて孤独で、地へ向けて長い睫毛を煙らせてゐた。雪子は新しく家族の仲間に加はつた自分に対し、若い女性に対し、何の影響をも示さないこの少年に、焦立いらだたしさと、不満ふまんを含まないわけにはゆかなかつた。

だが、その美しさには雪子も呆然ぼうぜんとして息を吐いた。父は梅磨を自分の蒐集しゆうしゆう物ぶつの愛玩品あいがんの中に数へ、しかもその中で最も氣に入つた一つのものゝやうに、書齋しゆさいで、庭

で、二人は大概一緒だった。そして父はこの息子に下手からお世辞を使ふ態度を取つてゐた。梅麿は父がお世辞を使ふ氣持を見抜いて、とぼけて悠々とお世辞を使はれてゐた。だが決して調子に乗らなかつた。そして、父が理由もなく癩癩を起しかけて来ると、少女よりやゝしつかりした綺麗な唇を嬌然と笑みかけて、あどけないことを云つたり、親を煽てたり、他人の悪口を云つたり、およそ父の弱点が喜びさうなところを衝いて、素知らぬ顔で父の氣分を持ち直させることに、氣敏い幫間のやうな妙を得てゐた。

雪子はいやらしいと思ふ以上に、その技巧の冴えに驚嘆した。だが、梅麿は父以外にはその手は絶対に使はなかつた。

父の氣紛れが、面白くない仕辛い仕事を望むときには、梅麿はすーつと脇へ除けた。夜中に急に風呂を沸かさせたり、椽の下奥に蔵つてある重いものを取出さしたり——さういふときには兄の軀之助が、ぶつゝいふ召使を困りながら指揮して、その衝に當つた。父はこのことを知つてゐて、

「梅は狡いやつだ」

といつて笑つたが、その狡さが氣に入つてもゐた。

兄の軀之助は反対に調法の外、何から何まで、父の氣に入らなかつた。父は兄息子の顔

を見るとむつと黙つて仕舞ふか、癩癩を浴せかけた。命令通り出来上つた仕事も、その命令通りにした愚直なことが、そこに叱言こごことの隙間すきまもないことで父を怒らせた。兄はしじゅうおど／＼してゐて、眼鼻立ちに神経の疲労と愁うれひの湿りがあつた。濃い頭の捲毛まきげだけが兄弟似寄つてゐた。兄弟は父が現代教育の方針に不満といふ理由で、一人は中学を、一人は高等学校を、途中から退学させられて、通つて来る二三人の家庭教師に就つかされてゐるが、実は父が家庭に於ける享樂きやうらく生活に手不足を来きたすのを、父は極力嫌つたためでもあつた。

兄の頼之助は雪子の部屋へよく遊びに来た。雪子が部屋の周圍に、蔵から出して来た、真ほんもの、植物以上に生々と浮き出てゐる草花が染付けられてゐる鉄辰砂てんしんしゃの水差や、掌てのひらの中に握り隠せるほどの大きさの中に、恋も、嘆きも、男女の媚態びたいも大まかに現はれてゐる芥子人形や、徳川三百年の風流の生粋きつすいが、毛筋で突いたやうな柳と白鷺しらさぎの池水ちすいに彫みきざ込まれた後藤派の目貫めぬきのやうなものを並べて、自分の店から持つて来たいろ／＼の専門の道具や薬品を使つて手入れしながら、面倒臭く思つて伸びをしたり、または芸術といふ不思議な幻術が牽ひき入れる物憎い恍惚こうこつに浸ひたつたりしてゐると兄はおづ／＼入つて来る。彼はかの女の傍に立膝たてひざして坐すわると、いくらか手入れを手伝ひながら、かの女の氣配を計つた。かの女の丸い顔をいぢらしさうに見た。

「うちは、これでね、思つたほど豊かぢやないんですよ。何しろ父はあゝいふ風でせう。何でも見付け次第買つちまつて、とき／＼月末の生活費の払ひの現金にも困ることがあるんです」

かの女は興味索然としながら話に釣り込まれた。

「あなた方ご兄弟は将来どうするお積り」

「父が生きてゐるうちは今の財産を使つちまつても、父の恩給で米代ぐらゐはありますが、父が死んだらこんな道具類でもぽつ／＼売つて喰つて行くより手はありません。それにしても贗物にせものが多くて」

「持参金附きのお嫁さんでもお貰もらひになつたらいかゞ。ご兄弟とも美男子だしお家柄はよし」

かの女は擲揄からかつた。軈之助は真まに受けた。

「だめですよ。第一僕等に学歴はなし、それにかう見えて、僕は女に対してうんと贅ぜい沢たくな好みを持つてゐるんです」

「弟さんは」

「あれは父と同じに女嫌ひらしいです」

さうかと思ふとまたの日は急に朗らかで、いそ／＼して来て、どこから探し出して来たか、古風な猥^{みだ}らな絵巻物をかの女にそつと拵^{しげ}げかけるやうなこともあつた。かの女は極力平静を装つて、彼の顔を正視した。

「それどこが面白いのでございます」

すると、彼は照れて、

「僕にはものを考へないといふモットー以外には生きる方法はないんです。単に刹那^{せつな}の刺戟^{しげき}のほかには……」

と負け惜しみのやうなことを云ひながら、手持ち不沙汰^{ぶさた}にそれを巻き納めて部屋を出て行くのだつた。

父のYは旧幕の権臣の家の後嗣^{こうし}者であつた。旧藩閥の明治の功傑たちは、新政府に従順だつた幕府方の旧権臣の家門^{ねぎら}を憾^ねふ意味から、その後嗣者を官吏として取り立てた。Yは相当なところまで出世した。しかし、Yの持つて生れた度外れの氣位と我^が執^{しゅう}の性質から、たうとう長上^{ちやうじやう}と衝突して途中で辞めて仕舞^{しま}つた。遺産のあるまゝに生来の蒐^{しゅう}集^{しゅう}へ

癖に耽つて、まだ壮年をちよつと過ぎたくらゐの年頃を我儘三昧に暮さうと決めてしまつた。恐るべきエゴイストの墓標のやうな人間であつた。

Yの権高な氣風と、徹底した利己主義に、雪子はやゝ超人的な崇高な感じは受けたが、下町娘の持つ仁侠的な志氣はYにひどい反抗と憎みを持つた。あはよくば、Yが寵愛してゐる弟息子を奪つて、父の傲慢の鼻を明かしてやらうとさへヒステリカルに感じた。

兄の息子は、膨れ目蓋のしじゅう涙ぐんでゐるやうに見える、皮膚の水つぽい青年だつた。女のこと一度落度があつたといふ噂だが、しかしそのことが原因ばかりでもない蔭の人の性分を十分持つてゐて、父や弟から、身内と召使ひとの中間の人間に扱はれ、雇人に混つて、自然にこの別寮の家扶のやうな役廻りになつてゐた。しかし、見かけほど悲劇的な性格もなく、どこかのん気で愚なところがあつて、情操的にものを突き詰めては考へられなく、萍の浮いたところがあつた。

母のゐないこの別寮で、兄の軛之助は主婦のやうな役目にもなつた。雪子が来て二月ほ

どしたある日、弟の梅麿はかの女の部屋に来てゐた兄のところへ珍しく入つて来て、

「兄さん、僕に出して呉れた着物、綻びが切れてるぢやないか」と袂たもとをあげて脇を見せた。

すると兄ははら／＼しながら、美しく重圧して来る弟の黒い瞳に堪へないやうに眼を伏せて目蓋まぶたをぴり／＼させ、

「だつて、いま、婆ばあやも女中も使ひに出しちやつてゐないんだから仕方がないよ」

すると梅麿は苦いものに内部から体を縊よぢ廻されるやうに憂鬱ゆううつな苦悩を表情に見せて、
「もう浴衣ゆかたでなきや暑くて、お父さんにいひつかつた庭の盆栽へ水をやりに行けないぢやないか——兄さん自分で縫つてお呉れよ」

兄の不甲斐ふがいない性質に対する日頃の不満と、この弟を凝こつた瑩えいぎ玉よくのやうに美しくしてゐる生れ付き表現の途みちを知らない情熱と、生命力の弱いものに対しては肉親でも奴隸どれいのやうに虐しいたげて使つてしまふ親譲りのエゴイズムとが、異様で横暴な形を採つて兄に迫つた。

兄は困つたやうな情けないやうな表情をして、突き付けられた浴衣ゆかたに近寄つて行つた。

しかし、傍に雪子のゐるのを見ると、薄い乾いた下唇をちよつと舌の先で湿らしてから、兄はにやりと笑つた。

「無理をいふなよ——だめだよ。男になんか、縫へなんて……」

そして腕組みをして昂然こうぜんとした態度を作った。それには不自然なところがあつた。兄はありたけの勇を揮ふるつて弟の瞳に睨にらみ合つた。

雪子の立場が切ないものになつて来た。雪子は彼女の箆笥たんすの観音開きから急いで針道具を取出して来て、弟の持つてゐる浴衣に手をかけた。

「何でもありませんわ。あたし縫つてあげますわ」

すると、梅麿は浴衣を雪子の手からすつと外はづして、なほ兄に向つていつた。

「兄さん縫つてお呉れよ。いつもうまく縫ふぢやないか」

兄は赤くなつた。弟は兄になほも迫つた。場合によつては平気で、兄が雪子に聞かれて、もつと顔を赤くしさうな暴露の意地悪さを用意して、ぜひ兄に縫はせないでは置かない気配を示した。そこにはまた、雪子といふ第三者が入り込むのを潔癖けつぺきに嫌ふいぢぢさもあつた。

雪子は弟が肉親の兄に対する執拗しつような残忍な仕打ちと、また女の身の雪子が折角せつかくの申出うしでを態よく拒否された恥とで、心中怒りが盛り上つて来た。何として仕返しをしてやらう——雪子は針道具をそこへ置いたまゝ、青葉の映る椽側えんがわへ離れて行つて、その柱へ

凭^{もた}れてまじく弟を見詰めてゐてやつた。

兄は雪子の氣配を察するだけに、いよくその場の処置が困難になつて、ただ生返^{なま}事を
して萎縮^{いしゆく}してゐた。

雪子はふと、母もなく我執の父の下に育つて、情のしこつた弟息子の親への甘えごろ
が、兄へかうも變つた形を採つて現はれるのではないかと氣がついた。そして、生命力の
薄い、物に浮れ^{うか}易い^{やす}兄は、到底弟のこの本能の一徹な慾求を理解もし負担もしてやる力
はないのだと思つた。兄は彼の紛らし易^{やす}い性分から、彼の愛の慾求を何かに振り撒^まき、繋^{つな}ぐ
ことによつて、彼自身だけの始末をつけてゐた。彼はこの頃いよく雪子に向けて心を寄
せる傾向が見えてゐた。

兄は雪子の眼の前で針仕事をする姿を、何としても見せたくないらしく、いかに弟に迫
られても薄笑ひしてゐて、応じなかつた。そして顔色を蒼^{あお}ざめさしたり、急に赤めたり、
しかもわきへ避けて行かないで、だんく眼と口とが茫漠^{ぼうばく}となるところを見ると、一種
の被虐性の恍惚^{こうこつ}に入つてゐるものゝやうに見えた。

弟はこれに対してますく執拗^{しつよう}になり、果ては凡^{あら}ゆる侮誣^{ぶふ}の言葉突きつけて兄に向
つた。

雪子は見ではゐられない気がした。こんなに執拗に取組まなければ愛情の吐け口を得られない兄弟の運命や性格の原因をどこへ持つて行つたらいいか、その詮索せんさくをするのさへいま／＼しいほど、心を不快に底から攪かき廻された。いまから考へると多分の嫉妬しともあつたやうに思ふ。さういふ險けわしい石火いしびを截きり合つて、その裂目さけめから汲くまれる案外甘い情感の滴り——その嗜慾しよくに雪子は魅惑を感じた。雪子の細胞には、他人のさういふ仕打ちの底の心理を察して羨うらやむだけの旧家きゅうか育ちの人間によくある、加虐性も被虐性も織り込まれてゐた。

弟はたうとう兄の薄皮の手首を、女のやうにじーつと抓つかつた。兄は真赤に顔を歪ゆがめてそれを堪へてゐた。雪子は激動の極、少し痴呆ちほう状態になつて却かえつて逆に刺戟しげきを求めるころから、もつと眼の前で惨劇の進むのに息詰まる興味を持つやうになつてゐた。

それが終ると弟は浴衣ゆかたを抛ほうり出して、手早く帯を解いて、それから着てゐた袴あわせも脱いだ。「僕、縫くつて呉れないなら、裸で庭へ出て行くから——」
行きかける風さへみせた。

兄はあわてゝ弟を捉へた。

「だめだよ。そんななりで、君、感冒をひくぢやないか」

兄は弟が小さい時感冒から肋膜の氣になつたのを覚えてゐて、それを氣遣つたものゝ、もつと大きな原因は、この兄弟は生まれつき肉体の露出については不思議な羞恥の本能を持つてゐた。他人に見られるやうなところで、どんな必要の場合でも肌を脱いだり、裾をからげたりは決してしなかつた。兄弟同志の間では、なほ更それは猥らなものであるやうに嫌つた。

いま弟がそれを敢てするのは、必死の羞恥を突き付けて、兄に必死の決意を促す最後の脅迫手段だつた。

「君、裸を垣根から通る人に見られるぢやないか」

「かまふもんか」

兄弟は死のやうに蒼ざめて争つた。

兄は息が切れるやうに喘いだ。眼を伏せて、なるべく見ないやうにして、着物を弟に着せようとした。弟は肩ではねのけた。幾度か少青年の白磁色の身体が紺豎縞の大島の着物に覆はれては剥け出た。兄はその所作の間に、しばしば雪子の方を振り向いてかの女の

氣配を窺^{うかが}つた。

兄の氣持を察すると、弟の童貞で魅惑的な肉体を、自分が心を寄せかけてゐる若い娘に見られることは嫉^{ねた}ましく厭^{いと}はしかつた。だが我意^{つらぬ}を貫くことゝ兄を脅^{おど}すことの一閃^{ふけ}に耽^{ふけ}る弟は、今は全く雪子の存在などは無視した。弟は一体ふだんから雪子の存在をどう考へてゐるのか、女といふものに対してどういふ感受性を持つてゐるのか、全く不明だつた。それは雪子を寂しく焦^{いらだ}たしいものにしたが、この場合、彼が何^{なんびと}人に対しても嫌ふ裸身を雪子の前ですらりと現はすといふことは、たとへその目的は兄に向つてゐるとはいへ、副作用として雪子は無視の輕^{けい}蔑^{べつ}を斜^{はす}に受けないわけにはゆかなかつた。だが、こゝに至つて雪子は怒らうと思つてもなぜか力が脱けた。

雪子を女として少しも顧慮されない自分を、急に魅力のない卑しいものに感じて、弟に對して感じてゐるふだんの心の底の寂しさを一層深めた。

「仕方がないやつだなあ」

兄はたうとう負けて、雪子がそこへ置いて來た針道具を、ちよつとかの女に会^え釈^{しゃく}して、手元へ引き寄せた。針さしから手頃の針を抜き取り、針先を頭の髪の毛へ突き込んで油をにじませた。アイヌの郷土細工の糸巻から、弟の着物と似合ひの色糸を見付けて、針の孔^{めど}

へ通した。それからいかにも物馴れた調子で縦びを繕ひにかゝつた。

男の針仕事——。いかにぎこちなく、佻い^{わび}い形でそれが行はれることだらう。雪子はあらかじめぞりつと寒気を催すと共に、その不快な醜さによつてかの女の神経の肌質^{きめ}をさゝくれ立たされることを覚悟してゐたが、兄の手振りを見ておや／＼と思つて安心した。より以上に感心した。それは女のする通りの所作に違ひないが、しかしその通りを男の青年がするのに、少しも男の格を崩し、また男の品位を塩垂れ^{しおた}さすやうな女々しい窪み^{くぼ}は見出^{みいだ}せなかつた。従^{しやうよう}容として、たゞ優しい仕事に、男がいたはり携^{たずさ}はつてゐる自然の姿に外^{ほか}ならなかつた。結局、兄の性格としてそれは身についた仕事であり、弟へしてやつてゐる平常からの馴^なれであり、実は好みの就業となつてゐるのかも知れない。

「男の針仕事もいゝものだ」

と、雪子は胸の中でさう嘆声^もを漏らしてゐた。

だが、雪子は羞明^{まはゆ}いのを犯して、兄の縫ふ傍に立つてゐる弟の裸身に眼をやると同時に、全面的に雪子に向つて撞^つき入らうとする魅惑^{ぼうぎよ}を防禦して、かの女の筋肉の全細胞は一たん必死に収斂^{しゅうれん}した。すぐ堪へ切れない内応者があつて、細胞はまた一時に爆発した。そしてすっかり困迷して痴呆^{ちほう}状態に陥つた雪子の心身へ、若く甘い魅惑は水の如く浸^{ひた}り込

んだ。

雪子はこの若きダビデの姿をいかに語らう——ミケランヂエロの若きダビデの彫像の写真にしても、このときまだ雪子は知らない。後に歐洲おうしゅうの彷徨ほうこうの旅で知つたのである。それは伊太利イタリーフロレンスの美術館の半円周の褐色の嵌め壁はを背景にして立つてゐた。それが持つ憂愁の甘美は、西洋的の動物質と東洋的植物性との違ひはあるが、梅麿が持つものとはほとんど同じだつた——。健かな肉付きは、胸、背中から下腹部、腰、胴へと締しまつて行き、こどもの豹ひょうを見るやうだつた。流暢りゅうちやうで構梁たしの慥かな肩の頂面に、つんもり扇形の肉が首の附根の背後へ上り、そこから青白く微紅を帯びた頸くびが擡もたげられた。

だが、雪子の魅みせられたのはさういふ一々のものではない。何代か封建制度の下に凝り固めた情熱を、明治、大正になつてまだ点火されず、若し点火されたら恨みうらみの色を帯びた妖艶ようえんな焰ほのおとなつて燃えさうな、全部白臘で作つたやうな脂肉のいろ光沢つやだつた。それにはまた喰ひ込まれてゐる白金の縄を感じた。

久隅雪子はほたる見物にことよせて私を招き、文学者である私にだけは是非ぜひこの話をし

て、自分のこの家に落着く気持を分担して貰ひ度いのだった。この家はその奇矯な親子兄弟の棲んでゐた家だつた。雪子は話し終つて、ほつとして云つた。

「その父親が病死すると直きでしたの、その兄弟が心中しちまつたのは……」

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成10 岡本かの子」国書刊行会

1992（平成4）年1月23日初版第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第三卷 小説」冬樹社

1974（昭和49）年4月30日

初出：「文芸」

1937（昭和12）年7月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそつて、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：湯地光弘

2016年1月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

過去世

岡本かの子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>